

優れた防火服を
開発する技術力で
社会に貢献する



恵比寿支店

小林防火服 株式会社

こばやしぼうかふく・かぶしきがいしゃ

住所 〒150-0022
東京都渋谷区恵比寿南1-2-9

電話 03-3713-2860

業務 防火服製造販売

創業 1867年

WEB <https://kbpro.jp/>



江戸末期から現在まで防火服・消防装備の専門店としての活動を展開



偶然の出会いから 明治政府と契約を締結

江戸時代が終わりを迎えようとしていた慶応3年（1867）、下渋谷村 現在の渋谷区恵比寿に創業した小林刺子店。足袋屋で修業を積んだ小林久蔵氏が立ち上げたこの店では、消火や作業、祭事などに使う刺子半纏を中心に製造・販売を行っていました。刺子とは、重ねた布を手で細かく刺し縫いする伝統的な技法です。創業翌年に明治維新によって明治時代

が始まり、二代目の竹次郎氏が小林刺子店を受け継いでしばらくした頃、偶然店の前を通りかかった人物が、刺子外套について質問してきたそうです。

「その人は創設されたばかりの警視庁消防部関係の人で、お茶を飲みながら5時間ほど話をし、消防刺子の独占契約を結んだと伝えられています」と話す、小林寿太郎代表取締役。小林刺子店を前身とする小林防火服株式会社の六代目です。

政府から発注を受けた竹次郎氏は、全国300軒以上の刺子職人に協力を仰ぎ、大量の刺子外套の製造を進めました。機械織刺子を発明して刺子の大量生産を実現させたのは、三代目の菊太郎氏。機械生産によってこの分野で全国を制覇し、隆盛を極めることになりました。菊太郎氏は十数人いた子どもたちに刺子に加えて学生服や洋服、内装のカーテンなどの製造・販売を行う店を経営させ、事業を拡大させていきました。



小林刺子店時代の消防外套カタログ

新技術の開発によって 戦後復興を実現

現在、小林防火服は先端技術を用いた防火服をはじめ、防火関連の各種製品を取り扱っています。取引先のほぼ100%が官公庁、自治体です。

日本の消防組織は自治体、市町村単位に分かれており、その数は全国で700以上。小林防火服では、たとえば豪雪地帯である、都市部に空港がある、といった地域の特性や特殊事情を持つ中、大規模組織のニーズに即したオーダーメイドの防火服の開発に取り組んでいます。最先端の優れた製品を納めることで、自然と取引先が広がっていきませんが、広がり過ぎると他社との価格競争になってしまします。逆に、性能も価格も高いものだけを販売していると取引高が縮小するリスクが生じるため、適切なバランスを保つことが重要です。

「私の祖父の喜代治は四代目として小林刺子店を継ぎ、第二次世界大戦後に店と住居を建てて事業復興に取り組みました。恵比寿で戦後最初に家を建てたというのが、祖父の自慢でした」

その頃、喜代治氏は戦前・戦中に陸軍の難燃生地を開発をしていた東京大学の東教授から「頭にある知識を活かしたい」と声を掛けられました。作業用保護帽などを扱う新井帽子店（株式会社アライヘルメットの前身）を営んでいた戦友の新井広武氏と協力して、新たな消防装備の開



発に取り組みました。

東教授の研究成果を引き継いだ祖父は、米国製の難燃ゴム引き加工のネオプレンゴムを刺子生地につけたブルーネオという消防服の開発に成功。熱が伝わらないように起毛した綿で部分接着して空気の層を作った製品を防火服と命名し、店名も小林防火服に変更したのです。

五代目を継いだ小林代表の父、虎太郎氏は先代の喜代治氏の長男で、ミシンや近代縫製を勉強して製造を担当。化学を学んだ次男が開発を担当し、次女が経理と営業を仕切り、兄弟で役割分担して会社運営を行っていました。

ISOの防火服国際規格の 策定に当初から参加

大学卒業後、化学メーカーでの3年間の業務経験を経て小林防火服に入社した小林代表は、技術開発をしていた叔父から事業内容やポリシーなどを学びました。「バブル崩壊後の繊維業界は厳しい状況でしたが、防火服という特殊な分野な

1867年

初代・小林久蔵氏、江戸下渋谷村（現在の渋谷区恵比寿）に小林刺子店を創業

1870年

二代目・小林竹次郎氏、小林刺子店の経営を引き継ぐ

1923年

三代目・小林菊太郎氏、機械織刺子による大量生産体制を確立

1945年

四代目・小林喜代治氏、ネオプレン加工生地を研究

1961年

個人営業から株式会社に組織変更。名称を小林防火服株式会社に変更

1969年

五代目・小林虎太郎氏、代表取締役就任

2006年

六代目・小林寿太郎氏、代表取締役就任

2022年

小林寿太郎氏、ISO/TC94/SC14 国際副議長に就任

2023年

小林寿太郎氏、一般社団法人日本消防服装・装備協会会長に就任



時代のニーズにあわせて ビジネスモデルを探る

小林代表が現在取り組んでいる最大の課題は、お客さまのニーズの変化に対応するビジネスモデル作りです。

「近年、ビジネスモデルを競う時代になってきました。防火服をリース契約で提供して回収や修理、検査、クリーニングを行ったり、損保会社と連携して修理保証を付けたらといったビジネスモデルです」

欧米の会社が得意とする、そうしたビジネスモデルが日本で浸透するには、少し時間がかかると予想されていました。それが、火災現場で発生する発がんリス



クのある化学物質の問題が注目されたことで、一気に広がったのです。

もうひとつの重要課題は、人材の確保です。安定して長期間働いてくれるスタッフが 많이 製造部門に比べ、営業や経理のスタッフは定着しにくいという状況の改善方法を検討しています。

「36年前に自社ビルを建設した際、西武



代表取締役の小林寿太郎さん

信用金庫さんには、いろいろとサポートしていただきました。取引先を温かく見守ってくださる金融機関だという印象を持っています」

江戸時代から続く防火服作りという事業を、時代の変化に対応しながらさらに発展させるために、将来を見据えながら小林代表は課題への対応を進めています。

小林代表が小林防火服に入社した頃、ISOの防火服の国際規格の基準作りが始まりました。叔父のすすめで小林代表はISOの国際会議に日本代表として参加。国際的な舞台に進出したいという思いは、ISOでの活動によって浄化され、冷静な視点で世界を見ることができるようになったと、当時の心情の変化を振り返ります。

「私のやる気を削がないように、上手に導いてくれたと感謝しています」

当時、小林代表が父の虎太郎氏から聞かされたのが「世界を制しようと思ってはじめて日本を制することが、日本を制しようと思つてはじめて東京を制することができる」という言葉。大きなことを考えるのはいいが、まず目の前のことをやって専門店に徹することの大切さを父や叔父から繰り返し伝えられました。

「世界各地で開催される会議や展示会で各国の防火服の専門家と意見を交わし、そこで得た情報を開発に活かしていきました。叔父と私は、独自の技術で世界に負けないものを作りたいと考えていたんです」

その結果、国際規格をクリアした上で欧米の水準を超える技術の開発に成功し、特許も取得。東京消防庁が国際規格に変わる際のコンペで採用されることになったのです。

10歩先の準備をして 3歩先へ進む

「当社の経営理念の第一は、時代を先取りした商品開発です。10歩先のことを考えながら3歩先を行く。先に行き過ぎると誰もついて来ないから10歩先の準備をして、時代が来た時に順番にカードを



消防の現場で活動する人々の安全を守る高性能な製品を開発してきた歴史を次の時代へと受け継ぐ取り組みを実践中

切っていくという姿勢が大切なんです」

試行錯誤を繰り返して社会の変化に対応し、世の中に役立つ企業であり続けることは、四代目の喜代治氏から現在まで受け継がれている、小林防火服の基本姿勢です。

重要な転換期を 乗り越えてきた経験

明治維新後の新政府との取引開始は、小林防火服の最初の大きな転換期でした。第二次世界大戦後、技術力によって政府との取引の再開に挑んだ時代も、重要な転換期です。

「高度経済成長期に、大手繊維メーカーに事業を取り込まれそうな状況になっていたんですが、叔父は独立独歩で行くという考えを変えませんでした。専門店と